

執 筆 要 領

- 1) 投稿の際には、本会所定の原稿表紙および原稿用紙を用いる。
- 2) 「寄稿区分」に示す原稿のページ制限を厳守すること。ただし英文、和文要旨は原稿枚数に入れない。会誌の刷り上がり1ページは原稿用紙5枚にあたる。
- 3) 表題は簡潔でしかも本文の内容を適切に表現するものでなければならない。(表2例参照) 連報形式は避ける。
- 4) 文章は平易な口語体とし、漢字は特殊な専門用語のほかは当用漢字を用い、かなは新かなづかいによる。周知でない術語や装置などについては脚注などによりわかりやすく説明する。
- 5) 章、節、項、小見出しの記号は原則として下記の要領に従って表記する。

章	1	2	3
節	1.1	1.2	1.3
項	1.1.1	1.1.2	1.1.3
小見出し	(1)	(2)	(3)
- 6) 単位は原則として CGS または MKS 単位系を用いる。単位の略記号は表1を参照する。
- 7) 外国語の固有名詞および訳語が確定していない外国語の術語は原則として原語で書くが、周知のものはカナ書きとする。なお必要な場合は原語を書き添える。
元素名、合金名、化合物名は化学名あるいは化学記号によつて適当に示す。(表2例参照)
- 8) 英字の大文字、小文字で混同しやすいものにはⒶⓐ, ギリシャ文字にはⓂ, 添字には上ツキ, 下ツキを傍記(いずれも朱記)する。またイタリックには——, ゴシックには~~~~(いずれも朱記)をその文字の下に付ける。(表2例参照)
- 9) 数式は原則として $\frac{a}{b}$, $\frac{a+b}{c+d}$ のように書くが、簡単な数式は a/b , $(a+b)/(c+d)$ のように1行に書く。
- 10) 表、図、写真の説明は英文とし(技術資料、講義、講演、解説はこの限りでない)、表、図、写真の意味が本文を読まなくても理解できるように書く。(表2例参照)
- 11) 表、図、写真原稿は本文中に挿入せず別紙とし、本文原稿右欄外にその挿入箇所を記入する。
表、図、写真原稿には右下隅に著者名を記入する。
図、写真の字数換算は原稿1枚で600字(原稿用紙1.5枚)とする。
- 12) 図原稿は、A4判またはB5判の大きさの用紙に書く。(表2例参照)
- 13) 写真原稿は原寸印刷を原則とするので、枚数にかかわらず、横6.7cmまたは14cm、縦18cm以内とし、必ず倍率または基準寸法を記入する。
- 14) 参考文献は通し番号を付け、本文の最後に一括して番号順に示し、本文中における文献引用箇所にはその文献の番号を上ツキ小数字で示す。また公表されていないものについては私信または脚注とする。
参考文献は、著者名：雑誌名、巻数(発行年)号数、ページの順に記載する。雑誌名は表3の略記例に従う。
単行書は、著者名：書名、(発行年)、ページ[出版社]の順に記載し、多数の著者による分担執筆のような場合は編者を書名の後に付記する。

(例) P. L. McCARRON and G. R. BELTON: Trans. Met. Soc. AIME, 245 (1969), p. 1161

H. D. GREENBERG: Metal Prog., 91 (1967) 5, p. 93

学振製鋼19委員会：製鋼反応の推奨平衡値, (1968), p. 55 [日刊工業新聞社]

八木：製鉄・製鋼(和田編), 金属工学講座 4, (1960), p. 1 [朝倉書店]

J. NUTTING: Materials Technology in Steam Reforming Processes, ed. by

C. EDELEANU, (1966), p. 11 [Pergamon Press]

佐藤：鋼の熱処理(鉄鋼協会編), (1970), p. 255 [丸善]